

5/30(月)

## 「音楽は旅をする ～「移動音楽論」からみた日本の近代化 西洋音楽の受容と翻案をストリートの視点から振り返る」

講師：大熊ワタル 演奏：ジントラムータ

ペリーとともに黒船から上陸した軍楽隊は、まさに軍事技術として導入されたが、次第にアトラクションや宣伝の音楽へと変容、街頭に浸透していった。

一方、歌謡では、明治政府は早々と伝統音楽を捨て、西洋音楽の全面的導入にシフトした。張り切る外国人教師や宣教師たちと、あくまでキリスト教は排除したい官僚のせめぎ合いの中、すべり込んだ讚美歌などが、現代に至るまで日本の歌謡に大きな葛藤・影響を及ぼした。



大熊ワタル (クラリネット・作曲)

80年代から前衛ロックバンドで活動開始。20代半ばでチンドン屋に入門、街頭でクラリネットを修行。現在主宰する「シカラムータ/ジントラムータ」の、実験性や即興性、ストリート感覚を活かした独自の音楽性で国内外に知られる。また映画音楽や演劇など領域を超えて活動中。著書に「ラフミュージック宣言～チンドン・パンク・ジャズ」など。



ジントラムータ

クラリネット奏者・大熊ワタルと、新世代チンドン太鼓奏者・こぐれみわぞうを中心に2000年代前半に結成。90年代から活動中の、チンドン×ジャズ×ロック×現代音楽=超ミクスチャーバンド「シカラムータ」の別バージョンとして始動。ライブハウス、フェスティバルから、路上パレード・デモまで国内外で公演多数。

6/2(木) 「ユーラシアの多様性、過去・現在・未来」

講師：川野明正・羽根次郎



ユーラシア大陸には民族と宗教が豊かな歴史的層をもっており、単に博物館の中だけでは論じられません。たとえば、チベット、雲南、タイに繋がる地帯では「メコン流域開発」が問題化し、またかつて東西交流史の舞台であった中央アジアでは中国主導の「二つのシルクロード構想」が鋭くかかっています。本講義は、ユーラシアの多様性を「移動」「開発」「交流」などのキーワードとともに考える講座です。



川野明正: 法学部教授, 教養デザイン研究科担当 1967年東京都生まれ。

2000年東京都立大学大学院人文科学研究科中国文学専攻博士課程満期退学。専攻: 中国民俗学 著書: 『中国の〈憑きもの〉—華南地方の蠱毒(こどく)と呪術的伝承』風響社、2005年 『雲南の歴史—アジア十字路に交錯する多民族世界』白帝社、2013年など。



羽根次郎: 政治経済学部専任講師, 教養デザイン研究科担当 1974年横浜市生まれ。

1996年一橋大学社会学部卒業。同大学院言語社会研究科在学中に中国天津市に渡り、2010年より中国社会科学院近代史研究所にてポストドクター。2013年に桐国、愛知大学現代中国学部助教を経て本学専任講師。専門はユーラシア東西交流史、現代中国社会論。



5/31(火)

## 「Goods Talk: 芸術・クラフト・オミヤゲの脳内シャッフル 美術・文学・観光・人類学のチャンプルー」

講師：中村和恵

アフリカ、カリブ海、オセアニア、そして日本の北方へ。

世界各地の物語と文化を、「モノ」をきっかけに、のぞき見かじり開きしていただく円座を設けます。やばかわいい岡本光博の「赤毛袋」から、アフリカン・プリントの布、アボリジナル絵画、フィジーのカヴァ・ボウルなどをご覧いただき、これはなに? どこからきたの? なぜこんな? にお答えします。世界は端っこから見るに限る。物語は歩いて知るに限る。球体探索へシャッフル!

中村和恵: 法学部教授, 教養デザイン研究科担当 詩人, エッセイスト, 比較文学者。

「世界」の端っこやマイノリティ、日本人のポジションについて、考えながら歩く人。著書に詩集『天気予報』(紫陽社)、エッセイ集『地上の飯』(平凡社)、『日本語に生まれて』(岩波書店)、共著論集『世界中のアフリカへ行く』(岩波書店)、翻訳『ドラゴンは踊れない』(アール・ラヴレイス著、みすず書房)などがある。



6/1(水) 「ディアスポラ・アートから見える世界」

講師：徐京植



ディアスポラ(離散民)の視線で見ると、世界は違って見えてくる。しかし、そのことを言語で十全に表現することはできない。なぜならディアスポラとは言語(文化)の狭間を流浪して、文化の自明性に疑いを投げかける存在だからだ。この点に、ディアスポラ・アートに着目する意義と、面白さがある。

徐京植: 1951年京都生まれの在日朝鮮人。

東京経済大学で「芸術学」と「人権論」を講義する。主な著書に、『新版ブリーモ・レーヴィへの旅』『ディアスポラ紀行』、『汝の目を信じよ-統一ドイツイ美術紀行』、『私の西洋音楽巡礼』、『越境画廊』などがある。

6/4(土) 「試演「水滸(みずのほとり)譚——ある水辺から——」

劇団：野戦之月海筆子・教養デザイン研究院生



今回の試演ではテント空間を、ある海と川のほとりと設定し、そこに一時人びとが流れ着くような試みをやってみよう。テーマは「帰還」である。参加者の国籍、年齢、位置が多様になる為、おそらく一人ひとり違うものを背負っているであろうが、過去や現在の世界、社会、個々の状況と向き合いながら、私たち「類としてのヒト」はどこに帰還していくのかを考察してみたい。テント空間が、わずかにでも携(しな)ることを願う。

劇団「野戦之月海筆子」

1994年の旗揚げ以来、テント劇を持続してきたゆるやかな集団。東京を拠点に日本全国各地、海外では台湾や北京、韓国でもテント公演を行っている。代表は桜井大造。近年の活動としては2011年秋、被災地石巻4カ所、首都圏3カ所にて『フクビキビキニ譚』。2013年5月、東京夢の島公園において『蛻(もぬけ)てんでんこ』を上演。2014年9月、東京夢の島公園において『百B円 神聖喜劇』を上演。2015年8月、横浜寿町と東京隅田公園山谷広場にて『ぐあらん洞スラム 正伝』、9月東京立川にて『ぐあらん洞スラム・モールド』を上演。